

保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成(2) : 小学校低・中学年版の作成

著者	立元 真, 古川 望子, 椎葉 恵美子, 齊田 聖美
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 教育科学
巻	31
ページ	77-86
発行年	2014-08-30
URL	http://hdl.handle.net/10458/5032

保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成(2)

—小学校低・中学年版の作成—

立元真¹ 古川望子² 椎葉恵美子³ 齊田聖美⁴

The Development of a Children's Social Behavior Rating Scale for Parent Administration - First to Fourth Year Elementary School Student Version -

Shin TATSUMOTO, Misako FURUKAWA, Emiko SHIBA, Kiyomi SAITA

子どもの問題行動傾向の治療的対処あるいは予防のためのプログラムとして、子どもと最も接触が多く、よくも悪しくもその行動に影響を及ぼしうる、子どもの親に養育上のスキルを教授するペアレント・トレーニングの研究が各国で研究がすすめられている。このなかで、我々が進めている“はなまるプロジェクト”のペアレント・トレーニングプログラムは、まず、3歳から小学校就学までの子どもを持つ保護者を対象とし、予防介入的にグループ形式で行われる集団介入プログラム(立元, 2005)と、これに問題解決セッションを加えて個別に行われる個別介入プログラム(Tatsumoto, Furukawa, Nagatomo, & Fukushima, 2011)から開発を開始し、その効果の検証が進められている。特に集団介入プログラムにおいては、介入を進めるペアレントトレーナーの養成が進められ、養成されたトレーナーによる介入の効果が示される実行可能性が示される段階にまで至っている(Tatsumoto, 2013; Tatsumoto, Furukawa, & Fukushima, 2013)。

はなまるプロジェクトの特性の一つは、介入を受ける幼児の母親の養育スキルのポジティブな面とネガティブな面、また、子どもの行動傾向のポジティブな面とネガティブな面の評価を、介入の前後に、また、個別介入の場合には他にも追加的に行うことを含めていることである。この評価の結果をフィードバックすることにより、保護者はプログラム参加の手ごたえを感じながら、進めていくことができる。

PCIT, Triple PやIncredible Yearsなどの既存のペアレント・トレーニングの試みでは、その効果査定や介入対象児のスクリーニングのために子どもの行動傾向を評価している。たとえば、EybergらのPCITでは、ECBI (Eyberg, 1980)が子どもの行動傾向におよぼす介入効果の指標として用いられている(Hood & Eyberg, 2003)。

また、Bor, Sanders, Markie-Dadds(2002)は、破壊的な行動傾向とAD/HDの傾向を持つ就学前児にTriple Pのペアレント・トレーニングプログラムを行い、ECBIと電話による子どもの行動傾

¹ 宮崎大学教育文化学部

² はなまる子育て支援プロジェクト

³ 宮崎大学教育学研究科, 宮崎市立住吉南小学校

⁴ 宮崎大学教育学研究科, 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

向の確認(PDR;Chamberlain and Reid,1987)による評価の方法を用いている。さらに, Triple Pの予防的な比較的軽い介入の効果を検討した, Turner & Sanders(2006)は, PDR, ECBIに加えて, 家庭や地域の生活の中での子どもの問題行動の生じうる場面の数を指標とするHCPC (Sanders & Dadds, 1982)という行動尺度を用いている。また, Heinrichs, SörenKliem, & Hahlweg(2014)は, Triple Pの集団介入の長期効果測定の際に, CBCL (Achenbach, 1991)を用いている。

行為問題をもつADHDの子どもにIncredible YearsのBasic Parent Trainingのプログラムを適用したJones, Daley, Hutchings, Bywater & Eames(2007)は, スクリーニング尺度として, ECBIとSDQ(Goodman, 1997: 問題行動の強度と困難性の質問紙)の下位尺度を用い, Conners 尺度(Conners, 1994)で効果査定を行っている。Bywater, Hutchings, Gridley & Jones (2011)は, 保育者への介入効果の評価のために, 保育者向けのSDQとECBIを併用している。

上記のような, 海外のペアレント・トレーニングプログラムで用いられるECBI, CBCLやSDQは, いずれも, 子どものさまざまな問題行動傾向を測定するために, 問題行動をあらかじめ想定し, それに合致する項目の数や強度が指標の核となっている。そのため, 多くの場面において不適切な行動が多い子どもにおいては問題行動の得点が高くなるが, 不適切な行動が特定の場面に集中しがちな子どもについては, その感度が低くなることが想定される。また, これらの尺度は, なんらかの問題の兆候をすでに示している子どもに対して, 子どもの明確な行動傾向の特性があることが臨床上の基準として用いられるために, 感度が低くなる。

これに対して, はなまるプロジェクトの幼児版の集団介入プログラムや個別介入プログラムでは, 介入を受ける保護者が, 子どものどの行動にブレーキをかけ, 代わりに, どの行動を強化子促進していくべきかを知ることができること, また, プログラム受講による効果を自覚しその後の維持・一般化のための動機づけを高めることを意図して, 社会的行動評価尺度(CSB-RS; 立元・古川・福島・永友, 2011)を開発し用いてきた。この尺度は, 『衝動的・多動的行動』(9項目, $\alpha = .875$), 『攻撃的行動』(6項目, $\alpha = .806$), 『協調的な適応行動』(7項目, $\alpha = .799$), 『同輩とのトラブルにおける適切な対応』(3項目, $\alpha = .826$), 『孤立行動』(6項目, $\alpha = .710$)の計31項目の行動傾向を7段階で評定する。『衝動的・多動的行動』, 『攻撃的行動』, 『孤立行動』といったネガティブな行動傾向だけでなく, 『協調的な適応行動』や『同輩とのトラブルにおける適切な対応』といった子どもの習得目標にもなりうる因子も含めて評価できる。

本研究は, 本研究では, はなまるプロジェクトの小学生版ペアレント・トレーニングの対象となる, 小学校1年生から4年生の子どもを対象にした, 予防的介入を視野において感度を高めた, 親評定による子どもの社会的な行動傾向を評価する尺度を構成し, その妥当性と信頼性を示すことを目的とする。

【方法】

調査対象

宮崎県内の小学校に通う1年生から4年生までの子どもをもつ母親863名, なお, 1年生から4年生の範囲内にきょうだいがいる場合には, そのなかでより年少の子どもについて回答するよう求めた。

調査手続き

宮崎県内の県北・中央部・南部の中規模の小学校の校長に調査の許可を得て、保護者向けの質問紙の配布および回収を依頼した。さらに、1か月後、同じ質問紙を配布・回収し、再検査信頼性検討のためのデータを取集した。

なお、質問紙を配布する際には、質問紙を封筒に入れて配布し、また、封筒に入れた状態で質問紙を回収した。

調査材料

幼児用親評定による社会的行動評価尺度(立元・古川・福島・永友, 2011)の作成過程で選出した、39項目を調査材料とした。

各質問項目への回答の方法については、立元ら(2011)と同様に、通常のリッカート法による評定に工夫を加えた。日常、子どもの行動を専門的な立場で見ている小学校教諭や幼稚園教諭、保育士、心理士などの専門的な立場にある者は、多くの子どもと接した経験から、相対化して子どもの行動傾向を評価することができる。ところが、一般の子どもの保護者にとっては、子どもの特定の行動を、相対化するための経験はそう数多いものではなく、評価に個人の主観やその時の感情の状態が反映されてしまう回答の揺れが発生してしまうことが危惧される。そこで、本研究で作成する尺度においては、各項目について、母親が日常の子どもの行動の頻度を明確にするために、1=まったくない、2=月に1回以上、3=週に1回以上、4=週に2・3回以上、5=日に1・2回、6=日に3回以上、7=日に5回以上の7件法で、保護者に評定するように求めることとした。

【結果と考察】

863ケースの回答のうち、90%以上の項目に回答が記された計722ケース(1年生218例、2年生204例、3年生170例、4年生130例)の回答を分析の対象とし、重み付けのない最小二乗法により因子を抽出した後、プロマックス回転による因子分析を行った。最小の固有値を1にして因子の抽出を行った後、因子の寄与の減少が他に比べ小さくなる地点で因子数を決定するスクリープロット図の検討結果から、因子数を2因子(37項目)に決定して再分析を行った。その結果、「ポジティブな行動」「ネガティブな行動」の2因子を抽出した(Table 1 参照)。

「ポジティブな行動」の15項目および「ネガティブな行動」の22項目については項目数が多く、内容的にも複数の特性が複合して測定される因子内の多次元性が想定されたため、さらなる因子分析を行った。

Table 1 因子構造 (ポジティブな行動傾向とネガティブな行動傾向)

項目番号	項目内容	ネガティブな行動	ポジティブな行動
ネガティブな行動 22項目 $\alpha = .891$			
23	じっとしていない, または何かに駆り立てられるように活動する。	0.657	-0.030
31	そわそわもじもじして, 落ち着いていない。	0.654	-0.043
27	衝動的に, じっくり考えないで行動する。	0.644	-0.044
21	きちんとしていなければならぬ時に落ち着きがない。	0.625	-0.028
22	集中力が長続きしない。	0.598	0.000
26	座っているべき時に, 席を離れてしまう。	0.590	-0.014
32	何かに夢中になって, 周囲の他の物事に注意が向かなくなる。	0.551	0.003
10	かんしゃくをおこす。	0.549	0.020
25	すねる。	0.540	0.004
4	家庭がしていることのじゃまをする。	0.537	0.028
28	自分の持ち物を壊す。	0.525	-0.094
30	イライラ, 不機嫌である。	0.519	-0.067
11	他の子どもにしている遊びや活動のじゃまをする。	0.511	0.125
6	怒りの感情にまかせて人をたたいたり, つねったり, けったりする。	0.498	0.052
39	めそめそと泣き言を言う。	0.490	0.053
3	怒りの感情にまかせて物を投げる。	0.475	-0.049
33	過度に走り回ったり, 高いところによじ登ったりする。	0.463	-0.046
19	つかみあいのケンカをする。	0.408	0.054
29	活動的ではなく, 動作がのろく, 元気がない。	0.386	0.050
15	悲しそうであったり, ふさぎこんだりする。	0.382	0.002
13	さびしそうにしている。	0.381	0.064
20	極端に恐がり, あるいは心配する。	0.379	0.105
ポジティブな行動 15項目 $\alpha = .827$			
12	活動中に自分から友だちやきょうだいの手伝いをする。	0.007	0.604
9	悪い点を指摘されても, 素直に受け入れる。	-0.074	0.585
14	親に言われなくても, 進んで手伝いをする。	-0.046	0.569
17	家族のいい所を見つけ, ほめる。	0.108	0.545
18	ひとと遊んでいる時にルールに従う。	-0.074	0.536
34	集団生活を楽しむ。	0.028	0.525
16	遊びや集団生活に参加する。	0.080	0.522
8	家にあるおもちゃや絵本などを片づける。	-0.094	0.522
7	大人が働きかけなくても, 遊びや活動の集団に加わる。	0.088	0.519
1	友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する。	0.079	0.498
2	決められたお手伝いをきちんと行う。	-0.050	0.496
24	自分の衣服などを適切な場所にしまう。	-0.072	0.484
38	家族と意見が対立したときには, 自分の考えを変えて折り合いをつける。	0.058	0.451
5	友だちやきょうだいから嫌なことを言われても, 適切に対応する。	0.065	0.446
37	友だちとのトラブルの際に, 自分の気持ちをコントロールする。	0.071	0.432
因子寄与		15.959	26.265

因子負荷量.30以上のもののみを掲載。

「ネガティブな行動」の22項目は、スクリープロット図の検討の結果から、3因子を抽出した(Table 2 参照)。

『衝動・多動』行動の因子 (9項目 $\alpha = .870$)

ネガティブな行動の中から最初に抽出された項目群は、「じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する。」、「きちんとしていなければならない時に落ち着きがない。」、「そわそわもじもじして、落ち着いていない。」、「集中力が長続きしない。」、「衝動的に、じっくり考えないで行動する。」、「座っているべき時に、席を離れてしまう。」、「何かに夢中になって、周囲の他の物事に注意が向かなくなる。」、「過度に走り回ったり、高いところによじ登ったりする。」、「自分の持ち物を壊す。」といった9項目からなる。いずれの項目も、子どもの衝動性や多動性の特性を表していると考えられ、この因子を「衝動・多動行動」の因子と命名した。

『外在的問題』行動の因子 (7項目 $\alpha = .792$)

次の質問項目のグループは、「怒りの感情にまかせて人をたたいたり、つねったり、けったりする。」、「怒りの感情にまかせて物を投げる。」、「つかみあいのケンカをする。」、「家族がしてい

Table 2 因子構造(ネガティブな行動)

項目番号	項目内容	衝動多動	外在的問題	内在的問題
衝動・多動 9項目 $\alpha = .870$				
23	じっとしていない、または何かに駆り立てられるように活動する。	.836	-.037	-.060
21	きちんとしていなければならない時に落ち着きがない。	.787	-.069	-.012
31	そわそわもじもじして、落ち着いていない。	.698	-.026	.082
22	集中力が長続きしない。	.688	-.087	.089
27	衝動的に、じっくり考えないで行動する。	.681	.033	.022
26	座っているべき時に、席を離れてしまう。	.587	.141	-.066
32	何かに夢中になって、周囲の他の物事に注意が向かなくなる。	.552	.012	.065
33	過度に走り回ったり、高いところによじ登ったりする。	.409	.241	-1.139
28	自分の持ち物を壊す。	.331	.234	.052
外在的問題 7項目 $\alpha = .792$				
6	怒りの感情にまかせて人をたたいたり、つねったり、けったりする。	-.015	.797	-.181
3	怒りの感情にまかせて物を投げる。	-.057	.653	.010
19	つかみあいのケンカをする。	.013	.620	-1.151
4	家族がしていることのじゃまをする。	.084	.546	.017
11	他の子どもにしている遊びや活動のじゃまをする。	.070	.519	.016
10	かんしゃくをおこす。	-.045	.502	.263
25	すねる。	.044	.377	.274
内在的問題 4項目 $\alpha = .631$ [精選後, 3項目, $\alpha = .658$]				
13	極端に恐がり、あるいは心配する。	-.093	-.074	.758
15	悲しそうであったり、ふさぎこんだりする。	.024	-.107	.647
29	活動的ではなく、動作がのろく、元気がない。	.137	-.147	.547
20	イライラ、不機嫌である。	.009	.161	.321
因子寄与		5.23	4.64	3.69

ることのじゃまをする。], 「他の子どもにしている遊びや活動のじゃまをする。], 「かんしゃくをおこす。」といった, 激しい攻撃行動を表す項目からなっている。また, 「すねる。」という項目は, 小学校の低学年から中学年の子どもにおいては特に, 引き続いて激しい感情表出や攻撃行動につながる関係から, この因子群に含まれたものだと考えられる。これらの, 激しい攻撃行動や感情表出の傾向は, 子どものエネルギーが, 子どもの外部に向けて放射された状態であり, 本研究では, この項目群で測定される特性に対して『外在的問題』と命名することにした。『内在的問題』行動の因子 (3項目 $\alpha=658$)

ネガティブな行動傾向の3つ目の質問項目群は, 「極端に恐がり, あるいは心配する。], 「悲しそうであったり, ふさぎこんだりする。], 「活動的ではなく, 動作がのろく, 元気がない。], 「イライラ, 不機嫌である。」の4つの質問項目からなる。 α 係数をもとに項目の精選をおこなった結果, 「イライラ, 不機嫌である。」の質問項目を抜くと, α 係数の値が向上するため, この項目を削除することとした。これらの3つの項目群に対しては, 問題事態に際しての不安や引きこもり, 抑うつにつながる, 子ども自身に攻撃のエネルギーが向けられた状態がうかがえることから, 『内在的問題』の因子と命名した。

「ポジティブな行動」の15項目は, スクリーンプロット図の検討の結果から, 2因子を設定し抽出した (Table 3 参照)。

『家庭内適応』行動の因子 (7項目 $\alpha=.803$)

このうち, 最初の質問項目群は, 「自分の衣服などを適切な場所にしまう。], 「家族のいい所を見つけ, ほめる。], 「活動中に自分から友だちやきょうだいの手伝いをする。], 「悪い点を指

Table 3 因子構造 (ポジティブな行動)

項目番号	項目内容	家庭内適応	集団適応
家庭内適応 7項目 $\alpha=.803$			
14	親に言われなくても, 進んで手伝いをする。	.795	-.157
2	決められたお手伝いをきちんと行う。	.706	-.159
8	家にあるおもちゃや絵本などを片づける。	.560	.014
9	悪い点を指摘されても, 素直に受け入れる。	.558	.112
12	活動中に自分から友だちやきょうだいの手伝いをする。	.554	.116
17	家族のいい所を見つけ, ほめる。	.514	.067
24	自分の衣服などを適切な場所にしまう。	.503	.077
集団への適応 7項目 $\alpha=.792$			
16	遊びや集団生活に参加する。	-.136	.848
7	大人が働きかけなくても, 遊びや活動の集団に加わる。	-.035	.728
34	集団生活を楽しむ。	-.014	.694
18	ひとと遊んでいる時にルールに従う。	.203	.432
37	友だちとのトラブルの際に, 自分の気持ちをコントロールする。	.178	.344
5	友だちやきょうだいから嫌なことを言われても, 適切に対応する。	.225	.316
1	友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する。	.283	.309
因子寄与		3.65	3.27

因子負荷量.30以上のもののみを掲載。

摘されても、素直に受け入れる。],「家にあるおもちゃや絵本などを片づける。],「決められたお手伝いをきちんと行う。],「親に言われなくても、進んで手伝いをする。」の7項目からなる。こらは、主に家庭内で保護者が直接観察しやすい、子どもの適応的な行動が示されている。そこで、この項目群を『家庭内適応』の因子(7項目 $\alpha = .803$)と命名した。

『集団への適応』行動の因子(7項目 $\alpha = .792$)

「ポジティブな行動」から抽出された2つめの質問項目群は、「遊びや集団生活に参加する。],「大人が働きかけなくても、遊びや活動の集団に加わる。],「集団生活を楽しむ。],「ひとと遊んでいる時にルールに従う。],「友だちとのトラブルの際に、自分の気持ちをコントロールする。],「友だちやきょうだいから嫌なことを言われても、適切に対応する。],「友だちやきょうだいに意地悪されても適切に対応する。」といった項目からなる。これらの項目は、家庭内での家庭生活への適応というよりは、学校などの家庭外の環境の中で観察される子ども集団に対する適応の様子を示す行動指標であると考えられる。そこで、この質問項目群を『集団への適応』の因子と命名した。

なお、これら5つの因子に分類された計34項目以外の5項目は、因子負荷量が小さい項目、共通性の低い項目や信頼性係数が下がってしまう項目であるなどの理由から尺度から除外した。

因子間相関

5つの因子間の関係について相関係数を算出した (Table 4 参照)。

Table 4 因子間の相関 (n=863)

	家庭内適応	集団適応	衝動・多動的	外在問題
集団適応	.483**			
衝動・多動的行動	-.137**	-.022		
外在問題	-.057	.041	.508**	
内在問題	.072	-.037	.360**	.375**

**p<.01

因子同士の関係について検討すると、『集団適応』と『家庭内適応』の間にほどほどの大きさの相関がみられた ($r = .483^{**}$)。家庭内での適応行動が良好な子どもはその行動を学校やその他の場での対子ども関係に般化させ良好な適応を示しうること、また、逆に、家庭内での適応行動をうまく身につけられない子どもは、学校やその他の場でも対子ども関係に苦勞しがちなことは想像に難くない。その意味で、妥当な因子間の関係性が示されていると考えられる。

『衝動・多動的』行動の高い子どもは、『外在問題』が高く ($r = .508^{**}$)、『内在問題』も高い ($r = .360^{**}$)という関係性が示された。これは、AD/HDの発達障害を持つ子どもが、2次障害として外在的な問題行動傾向や内在的な問題行動傾向を示す傾向が高いこととも一致する。AD/HDの診断名を得ていない子どもでも、その高い多動性や衝動性によって対人関係上の失敗を多く示し、それが『外在問題』行動や『内在問題』行動を高めてしまうことは、ありうることであり得ると考えられる。

また、『外在問題』行動と、『内在問題』行動との間に、正の相関($r=.375^{**}$)が認められた。『外在問題』行動が高い子どもは、その衝動性・多動性の高さのために対人関係を含めて様々な失敗をし、それを他者から責められたり、自らを責めたりすることによって、『内在問題』行動の傾向を高めてしまうことは、他の類似した調査でもたびたび指摘されている。例えば、佐藤・立元・坂田・岡安・佐藤(2001)は、教師評定の幼児用社会的スキル尺度によって、「不安引っ込み思案傾向」、「攻撃・妨害行動」、「不注意・多動」の3つの行動傾向を測定し、クラスタ分析によって4群に分けたところ、「攻撃・妨害行動」と「不注意・多動」が最も高い群は、「不安引っ込み思案傾向」も非常に高い値を示していた。

再検査信頼性

1ヶ月前の期間において、調査対象の母親に再度回答させた。そのうち、698名の回答が有効であった。因子ごとの合計点数について、1ヶ月前と現在の相関係数を算出した(Table 5 参照)。

Table 5 1カ月の期間をおいた再検査信頼性 (n=698)

1ヶ月前 \ 現在	家庭内適応	集団適応	衝動・多動的	外在問題	内在問題
家庭内適応	.962**				
集団適応		.970**			
衝動・多動的行動			.983**		
外在問題				.955**	
内在問題					.947**

**p<.01

各尺度にわたって、1カ月の期間をおいての再検査の得点との間の相関は、.983から.947にわたり、非常に高い相関を示した。すなわち、本行動尺度を構成する5つの下位因子は、通常特に変ったことがない限りは1ヶ月程度の期間で大きく変化することのない、安定性をもつ尺度であることが示された。

GP分析

尺度の弁別力を確認するために、各因子について、因子に含まれる項目の総得点の平均値をもとに上位群と下位群に分け、各項目の差をt検定によって検討するGP分析を行った。この結果、『家庭内適応』行動($t_{(720)}=32.59, p<.001$)、『集団適応』行動($t_{(720)}=29.22, p<.001$)、『衝動・多動』行動($t_{(720)}=33.00, p<.001$)、『外在問題』行動($t_{(720)}=34.78, p<.001$)、『内在問題』行動($t_{(720)}=35.57, p<.001$)の各因子において上位群と下位群の間の差が有意であり、弁別力が確認された。

上記のように、本研究では、親評定による、感度の高い行動尺度の作成を目指す観点から、34項目の行動評価項目を、7段階で評定し、『家庭内適応』行動、『集団適応』行動、『衝動・多動』行動、『外在問題』行動、『内在問題』行動の5つの観点から測定する、行動傾向尺度を作成し、小学生版子どもの社会的行動評価尺度(CSB-RS-ES:Children's Social Behavior Rating Scale

Elementary School version)と命名した。CSB-RS-ESは、十分な内的一貫性をもち、妥当な因子間相関、高い再検査信頼性および、十分な弁別力を示した。

その一方で、本研究における調査の範囲では、外的な基準となりうる別尺度との関係性の検討による妥当性の検討、すなわち基準関連の妥当性の検討が示されていない。今後、確認データの提供がなされることが望まれる。そして、なによりも、本尺度を用いての介入の成果をあげ、エビデンスをもつての子育て介入の普及と追及が望まれる。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1991) Integrative Guide to the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF Profiles. Burlington, VT : University of Vermont, Department of Psychology
- Bor W., Sanders M.R., Markie-Dadds C. (2002) The Effects of the Triple P-Positive Parenting Program on Preschool Children With Co-Occurring Disruptive Behavior and Attentional/Hyperactive Difficulties. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 30, 571-587
- Bywater T.J., Hutchings J.M., Gridley N.& Jones K., (2011) Incredible Years Parent Training Support for Nursery Staff Working within a Disadvantaged Flying Start Area in Wales: A Feasibility Study. *Child Care in Practice*, 17, 285-302
- Chamberlain, P., & Reid, J. B. (1987) Parent observation and report of child symptoms. *Behavioral Assessment*, 9, 97-109.
- Conners, C. K. (1994) The Conners Rating Scales : use in clinical assessment, treatment planning and research. In : *Use of Psychological Testing for Treatment Planning and Outcome Assessment* (ed. M. Maruish), 467-497. Erlbaum, Hillsdale, NJ, USA.
- Eyberg S. M. (1980) Eyberg Child Behaviour Inventory. *Journal of Clinical Child Psychology*, 9, 27.
- Goodman, R. (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire : a research note. *Journal of Child Psychology, Psychiatry, and Allied Disciplines*, 38, 581-586
- Heinrichs N.,& SörenKliem & KurtHahlweg K (2014) Four-Year Follow-Up of a Randomized Controlled Trial of Triple P Group for Parent and Child Outcomes. *Prevention Science*, 15, 233-245
- Hood K. K. and Eyberg S. M. (2003) Outcomes of Parent-Child Interaction Therapy: Mothers' Reports of Maintenance Three to Six Years After Treatment. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 32(3), 419-429.
- Jones K., Daley D., Hutchings J., Bywater T. and Eames C. (2007) Efficacy of the Incredible Years Basic parent training programme as an early intervention for children with conduct problems and ADHD, *Child : care, health and development* 33(6), 749-756.
- Sanders, M. R., & Dadds, M. R. (1982) The effects of planned activities and child management procedures in parent training: An analysis of setting generality. *Behavior Therapy*, 13, 452-461.
- 佐藤容子, 立元真, 坂田和子, 岡安孝弘, 佐藤正二 (2001) 幼児の母親の養育スキルに関する研究 (3): 親の養育スキルと子どもの社会的スキルとの関係 日本教育心理学会総会発表論文集 (43) 521
- 立元真 (2005) 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング介入 平成15年度～16年度科学研究費補助金 (基盤C) 研究成果報告書
- 立元真, 古川望子, 福島裕子, 永友絵理 (2011) 保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成 宮崎大学教育文化学部附属実践総合センター研究紀要 19, 39-47.
- Tatsumoto S. (2013) A Feasibility Study of Preventive Group Behavioral Parent Training for Mothers of Preschool Children Paper presented at the 43rd Annual Congress European Association for Behavioral and Cognitive

Therapies, Marrakech

- Tatsumoto S., Furukawa. M., Fukushima (2013) A Feasibility Study of Preventive Group Behavioral Parent Training for Mothers of Preschool Children II -A comparison of abuse risks-. Paper presented at the 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference, Tokyo
- Tatsumoto S., Furukawa. M., Nagatomo E., Fukushima (2011) The Effects of Individual Preventive Behavioral Parent Training to mothers referred from Perinatal Medical Center. Paper presented at the 3rd ACBTC 2011 Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference, Seoul
- Turner K.M. T and Sanders M.R. (2006) Help When It's Needed First : A Controlled Evaluation of Brief, Preventive Behavioral Family Intervention in a Primary Care Setting. *Behavior Therapy*. 37 131-142.